

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530601

研究課題名(和文) <けんか> についての認識の発達の多様性：幼児期3年間の縦断的研究

研究課題名(英文) The Development of preschool children's views about conflicts with peers: Longitudinal study from four-Year-olds to six-Year-olds

研究代表者

久保 ゆかり (KUBO YUKARI)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：10195498

研究成果の概要(和文): 本研究では、幼児期3年間に於いてけんかへの対処についての認識がどのように変化していくのかについて、4歳時点からインタビューを実施し、1年後、2年後を追い、発達の変化を検討した。その結果、けんかへの対処についての認識の発達の経路としては、2つあることが示唆された。一つ目は、自己抑制的で定型的な対処から、自他の要求を踏まえた交渉へと変化する経路であり、二つ目は、4歳から6歳まで、自己抑制的で定型的な対処について捉え続けるという経路であった。さらに、その2つ以外の経路の存在を示唆する事例が見出された。そこから、けんかへの対処についての認識の成長の仕方には、多様な経路のあることが示唆される。

研究成果の概要(英文): The purpose of this study is to explore the development of preschool children's conflict resolution with peers. Four-year-olds were interviewed on how they resolve conflicts with classmates. They were interviewed again one year later and two years later. The findings are as follows; We find two major change patterns of views about conflict resolution. The one pattern was when they were four-year-olds or five-year-olds, they were able to recognize the resolution is made possible by apologizing, and when they were six-year-olds, they became to recognize the autonomous resolution which was to conciliate the conflicts from the third person's point of view. The other pattern is that they were able to recognize the resolution is made possible by apologizing from four-year-olds to six-year-olds. In addition to these major changes, there appears to be some minor changes. It is suggested that there is diversity in developmental changes of preschoolers' views about conflicts resolution with peer.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：いざこざ、けんか、けんかへの対処方略、幼児期、縦断的研究、インタビュー法、参与観察、感情調整

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、他者との関係のなかで自分の思い通りにならないとすぐに短絡的な行動をとってしまったり、あるいは対人交渉の場を自ら避けて他者との関係を回避してしまったりする子どもの問題がクローズアップされている。本研究は、そのような社会性の発達の問題へ取り組む際の、基礎的な資料を提供しようとするものである。「他者の権利を侵すことなく自らの要求を主張できる力」の発達を捉えようとするとき、他者と自分の要求が対立するといった、他者とのコンフリクトに対して建設的に対処していく力の発達について検討することが決定的に重要であると考えられる。本研究では、けんかやいざこざといった、子ども同士のコンフリクトに対処していく力の発達に焦点をしばり、検討していくことにする。

(2) コンフリクトについての認識は、従来、社会的認知の発達研究において検討されていた。そこでは、コンフリクトが生じる架空の物語を提示してその登場人物について尋ねるという方法で研究されていた。そして、コンフリクトが当事者の何らかの対立によって生じ、それは交渉によって解決されることについては、小学校高学年になってから理解されるものであると考えられてきた。しかしながら幼稚園などで子ども達の遊び場を観察していると、年長組などではけんかが起きたとき、周りにいる子ども達が間に入り、当事者双方に意見を言わせて話を聞き、調停をする姿を目にすることがある。例えば、道具を使う順番をめぐる対立が生じた場合に、第三者の子どもは双方の事情を聞いたうえで「ジャンケンで決めたら」などと解決方法を提案して、いざこざをおさめることが見受けられる。幼児といえども、日常生活で遭遇するコンフリクトについては、潜在的には理解しているのではなかろうか。そして、それへの対処の仕方についてもある程度の認識を持っているのではないかと推測される。そこで、本研究では、その子どもが所属している園のクラスにおいてけんかがあるかどうかについて尋ね、日常生活場面でのけんかについての認識を取り上げて検討することにする。

(3) 本研究では、特に、子どもがコンフリクトについて語ることに注目する。というのは、ある事柄について語ることは、言語的に表象し自覚化することであり、それはその事柄に対する柔軟な調整を可能にすることにつながるからである。そのような方向性を有するものとして、子どもがコンフリクトについて語ることを取り上げる。けんかやいざ

こざといった、子ども同士のコンフリクトについては、遊び場面での観察研究は数多くなされている。しかし観察では行動は捉えられるが、どのように認識し思考していたかについては捉えられない。社会性の発達は「行動」と「認識」の二つの側面からなること、認識する力の発達によって行動の柔軟な調整が可能になることを考えるとき、認識を捉える重要性に気付かされる。そこで本研究は、幼児がコンフリクトをどのように認識しているか、およびその発達を明らかにすることを旨とする。

2. 研究の目的

(1) コンフリクトについての認識は、従来、コンフリクトが生じる架空の状況を提示して尋ねるという方法で研究されていた。それは、どの子どもにも同一の状況について尋ねることができるという長所をもった方法である。しかしながらその方法では、日常生活で実際に遭遇するコンフリクトに対してどのように認識しているのかについては、捉えること難しい。他方、従来の観察研究からは、幼児期にある子どもたちが、いざこざやけんかが起きたとき、当事者としてさまざまな対処をしたり、また周りにいる第三者としての子ども達が間に入り、当事者双方に意見を言わせて話を聞き、調停をしたりするといった姿が確認された。幼児といえども、日常生活で実際に遭遇するコンフリクトについては、潜在的には理解しているのではなかろうか。そして、それへの対処の仕方についてもある程度の認識を持っているのではないかと推測される。そこで本研究では、子どもが所属している園のクラスにおいてけんかがあるかどうかについて尋ね、日常生活場面でのけんかについての認識を取り上げて検討することにする。その際には、インタビューと並行して、所属園での自由遊び場面を参与観察し、けんかの実態についてフィールドノーツに記録する。そしてその記録を踏まえて、インタビューにおいて、幼児の話を聴くことにする。クラスでのけんかについて、その背景や文脈についてある程度知った上で、話を聴き、子どもにとっての意味を捉え、その発達的な変化を捉えることを目的とする。

(2) 従来、横断的な研究は進んでいるものの、縦断的な検討は緒についたばかりである。そこで本研究では、幼児期の3年間を追って縦断的にインタビューを実施して、けんかについての認識の多様性とその発達の道筋について検討を加えることも目的とする。

3. 研究の方法

(1) 幼稚園の年少組児に、1対1のインタビューを行い、クラスでのけんかへの対処について尋ねた。年齢の範囲は、3:11~4:10であった(4歳時と記す)。さらに、1年後(5歳時)、2年後(6歳時)に同様のインタビューを行った。なお、年少組5月から卒園までの3年間、毎週1回(約2.5時間)自由遊び時間を中心に参与観察を実施した。

(2) 参加者: X年に東京都内の幼稚園に所属していた年少組児(平均年齢; 4歳5ヵ月、レンジ; 3歳11ヵ月~4歳11ヵ月)のうち、本研究参加することについて、保護者から同意を得ることができた子ども達で、かつ、インタビューの誘いに応じてくれた子ども達。そして、X+1年後に年中組に所属し、X+2年後には年長組に所属し、それぞれの年度において研究参加について引き続き保護者からの同意を得ることができた子ども達で、かつ、インタビューの誘いに応じてくれた子ども達。25名(男子12名、女子13名)。

(3) インタビュー実施時期; 年少組における2月3月(4歳時点と記す)、1年後の年中組における2月3月(5歳時点と記す)さらにその1年後の年長組における2月3月(6歳時点と記す)。

(4) 手続き; 対象者所属園の1室にて、筆者と1対1のインタビューを実施した。質問は次の4点を中心に、子どもの表現や応答を尊重して、子どもが表したことを適宜繰り返したり確かめたりしながら尋ねた。

Q1: 組(対象児が所属しているクラスの名前)さんで、けんかになること、あるかな。

Q2: けんかは、どうしてけんかになるのかな。

Q3: けんかになったときには、どうしたらいいのかな。

Q4: そのあと、どうなるのかな。

(5) 久保(2005)で見出されたカテゴリを基にして、インタビューにおける子どもの応答を分類した。「カテゴリ」の内容について説明をしたうえで、心理学関連領域を専門としている研究者1名にも、プロトコル資料の分類を依頼した。一致率は、82.7%であった。不一致の事例は討議により一致させることが可能であった。

4. 研究成果

(1) 年齢集団としての変化(4歳時点・5歳時点・6歳時点におけるカテゴリ別人数の

推移); カテゴリに該当する応答をした子どもの人数を、時点別にまとめ、表1に記した。

表1 カテゴリごとの時点別人数 [単位:人]

カテゴリ	4歳時	5歳時	6歳時
わからない	4	3	0
逃げる	1	0	0
先生に言う	2	1	0
ゆずる	5	3	1
ごめんね	7	10	6
やめる	1	2	0
やめてって	1	0	0
順番こ	1	0	0
ジャンケン	2	3	3
とめるけど、とめられない	0	0	1
とめる	1	3	7
どうしたのって	0	0	2
話す	0	0	5

4歳時点では、「ごめんね」が最も多く、25名中7名(28%)だった。次いで多かったのは、「ゆずる」であり、5名(20%)だった。3番目に多かったのは、「わからない」であり、4名(16%)だった。そこから、4歳の時点では、けんかの対処について問われて、言語で語るまでには至っていない子どもが少なからずいて、けんかの対処について自覚的に捉えることがまだできかねている場合のあることがうかがえる。一方、ほぼ半数の子どもたちは、けんかの対処について問われて、謝罪や譲歩について語った。謝罪や譲歩は、けんかのおさめ方の定型的なものであり、自己抑制的なものと考えられる。4歳の時点では、そのような自己抑制的で定型的な対処法について自覚的に捉えられることがほぼ半数の子どもたちが可能であることがうかがえる。ただし、1名のみではあったが、「とめる」とした子どももいた。あるいは、「順番こ」や「ジャンケン」とした子どもは、それぞれ1名、2名いた。これらは、けんかを自身で交渉により収めようとしたものと解釈することができる。4歳の時点で、既にけんかへの対処についての認識には多様性のあることが示唆される。

5歳時点では、「ごめんね」が最も多く、25名中10名(40%)に上った。「ゆずる」(3名)とあわせると、過半数に達した(13名52%)。他方で、「わからない」とした子どもも、まだ3名いた。一方、「ジャンケン」が3名、「とめる」が3名、あわせて6名(24%)いた。そこから、5歳の時点では、けんかの対処について自覚的に捉えることが、引き続きできかねている場合のあることがうかがえる。しかし同時に、過半数の子どもたちが、謝罪や譲歩について語ったことから、5歳の時点では、過半数が、そのような定型的な対処法について自覚的に捉えられるようになったことがうかがえる。それとともに、「ジャンケン」および「とめる」と語った子どもの人数が増え、けんかを自身で交渉により収めようとしたものと解釈可能な語り方ができるように変化していったことがうかがえる。

6歳時点では、「とめる」が最も多く25名中7名(28%)だった。「どうしたのって」(2名)と「話す」(5名)とあわせると、14名(56%)となり、過半数を超えた。「ジャンケン」(3名)、「とめるけど、とめられない」(1名)を加えると、18名(72%)にのぼった。それ以外の子どもたち7名(28%)は、「ごめんね」「ゆずる」と語った。「わからない」とした子どもは皆無だった。そこから、6歳の時点では、多くの子どもたち(約7割)が、けんかを自身で交渉により収めようとしたものと解釈可能な語り方ができるようになったことがうかがえるとともに、そのほか子どもたち(約3割)は、謝罪や譲歩について語った。6歳の時点では、けんかへの対処として、自身で交渉により収めようとするものと、自己抑制的で定型的なものが、二つの大きな対処の仕方となっていたことが示唆される。

(2) 子ども一人ひとりの変化(4歳時点から5歳時点および6歳時点にかけての変化パターン); (1)では、年齢集団としての4歳から6歳への変化を見てきたが、4歳から6歳への変化の道筋を詳細に検討するためには、一人ひとりの4歳から6歳にかけての変化を見ていく必要がある。表2は、25名一人ひとりの4歳時点から5歳時点を経て6歳時点に至るまでのカテゴリの変化をまとめたものである。その結果、何人かが類似の変化のパターンを示すことが見出された。その変化のパターン別の人数は、表3に示した。

表2. 4歳時点から6歳時点への一人ひとりの変化

4歳時点	5歳時点	6歳時点
わからない	わからない	ごめんね
わからない	わからない	とめるけど、とめられない
わからない	ゆずる	ジャンケン
わからない	やめる	とめる
逃げる	ごめんね	とめる
先生に言う	ごめんね	とめる
先生に言う	とめる	話す
ゆずる	ゆずる	どうしたのって
ゆずる	ごめんね	ごめんね
ゆずる	ごめんね	話す
ゆずる	ごめんね	とめる
ゆずる	ジャンケン	話す
ごめんね	わからない	ジャンケン
ごめんね	先生に言う	ごめんね
ごめんね	ゆずる	話す
ごめんね	ごめんね	ゆずる
ごめんね	ごめんね	とめる
ごめんね	ジャンケン	ごめんね
ごめんね	とめる	ごめんね
やめてって	やめる	とめる
やめる	とめる	とめる
順番こ	ごめんね	ごめんね
ジャンケン	ごめんね	ジャンケン
ジャンケン	ごめんね	どうしたのって
とめる	ジャンケン	話す

一つ目のパターンは、4・5歳時点では、「ごめんね」「ゆずる」「先生に言う」と語ったが、6歳時点では、「とめる」「どうしたのって」「話す」と語ったというものである(8名、32%;表3の)。そこからは、4歳の時点あるいは5歳の時点では、けんかへの対処として、自己抑制的で定型的なものや大人に依存したものを認識していたが、その1年後・2年後の6歳の時点では、自身でけんかを交渉により収めようとする対処について自覚的に捉えることができるようになったことがうかがえる。けんか

への対処として語られる内容が、年齢が上がるにつれて、定型的なやり方や大人併存したやり方から、自他の要求を踏まえた交渉へと変化することが推測される。

二つ目のパターンは、4歳時点から6歳時点までずっと、「ごめんね」、「ゆずる」と語った、あるいは、途中の5歳時点でいったん別のことが語られたが、6歳時点では「ごめんね」、「ゆずる」に戻ったというものである(5名20%;表3の)。そこからは、4歳から6歳まで、けんかへの対処としては、自己抑制的で定型的なものについて自覚的に捉え続けたことがうかがえる。以上から、けんかへの対処についての認識の発達経路として、代表的なものが2つあるのではないかと推測される。

表3 変化のパターン毎の人数

4歳時	5歳時	6歳時	人
ごめんね・ゆずる	ごめんね・ゆずる		5
とめる・どうしたのって・話す			
ゆずる・やめる・先生に言う	ジャンケン・とめる	とめる・話す	3
ジャンケン	ごめんね	ジャンケン・どうしたのって	2
逃げる・先生に言う	ごめんね	とめる	2
ごめんね・ゆずる	ごめんね・ゆずる	ごめんね・ゆずる	2
ごめんね	ジャンケン・とめる	ごめんね	2
とめる	ジャンケン	話す	1
やめてって	やめる	とめる	1
わからない	やめる	とめる	1
わからない	ゆずる	ジャンケン	1
わからない	わからない	とめるけど、とめられない	1
ごめんね	わからない	ジャンケン	1
ごめんね	先生に言う	ごめんね	1
順番こ	ごめんね	ごめんね	1
わからない	わからない	ごめんね	1
合計			25

さらに、上述以外にも別の変化があった。1事例ずつのみであるが、以下のような4つのもが見出された。(a)4歳時点から一貫して自身でけんかを交渉により収めようとする対処について語った例、(b)4・5歳時点では語れなかったが、6歳時点では自身でけんかを交渉により収めようとする対処を語った例、(c)4・5歳時点では語れなかったが、6歳時点では謝罪について語った例、(d)4歳時点では謝罪について語ったが5歳時点では「わからない」というように語れなくなり、その後6歳時点では「ジャンケン」と語った例。そこから、けんかへの対処についての認識には多様性があり、その成長の仕方にも多様な経路がありうることが示唆される。

(3) 本研究では、架空の状況でのけんかではなく、園のクラスにおけるけんかという日常生活場面でのけんかについて尋ねることによって、生活場面から切り離さない形でけんかを捉えることを目指した。また、子どもたちの園生活を週1回参与観察をしている者がインタビューを実施することによって、園生活の文脈を子どもと共有した者が子どもの話を聴くこととした。そのことの成果のひとつとして、本研究では、最年少の4歳時点であっても、インタビューにおいて無答であった割合が少なかったことがあったと思われる。しかしながら、それでもなお、クラスにおけるけんかについて具体的には語らなかった場合があった。そのような場合には、園生活の文脈を共有していることを生かして、もっと個別的に尋ねることを試みてもよいかもしれない。たとえば当該の子どもが、ふだん園生活においてよくしている遊びのなかでのけんかについて尋ねるといった工夫が有効かもしれない。コンフリクトをそれが生じた文脈のなかで捉える方法をより一層洗練させていくことが、今後の課題である。

引用文献

久保ゆかり(2005)幼児期における「けんか」についての認識の発達：ネガティブな感情のやりとりの理解 東洋大学社会学部紀要, 42巻, 61-80頁.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

久保ゆかり 幼児期におけるけんかへの対処の発達 4歳時から6歳時にかけての変化 東洋大学社会学部紀要、査

読無、2011、48 巻、41-56 頁
久保ゆかり 幼児期における情動調整の
発達 変化、個人差、および発達の現場
を捉える 心理学評論、査読有、2010、
53 巻、6-19 頁
久保ゆかり 幼児の感情理解の発達を捉
えるインタビュー法 - 感情生活者として
の子ども一人ひとりと出会う 東洋大学
社会学部紀要、査読無、2009、31-46 頁

〔学会発表〕(計 7 件)

久保ゆかり 幼児期における けんか
への対処についての認識の発達 4 歳時
から 6 歳時にかけての変化、日本発達
心理学会第 22 回大会発表論文集、p137、
2011/3/25 東京学芸大学
久保ゆかり 情動発達研究の可能性と課
題；シンポジウム「現代発達心理学の行
方を占う - 社会・文化に生きる人間 - 」
における話題提供、日本発達心理学会第
22 回大会発表論文、p142-143.2011/3/26
東京学芸大学
久保ゆかり 幼児期における けんか
への対処についての認識の発達 5 歳時
から 6 歳時への変化の多様性 日本発
達心理学会第 21 回大会、2010/3/27
神戸国際会議場
久保ゆかり シンポジウム「教育におけ
る情動」にて話題提供 『園生活におけ
る感情』 日本教育心理学会第 51 回総会、
2009/9/22 静岡大学
久保ゆかり 怒りの表出機能についての
認識の発達 インタビューと参与観察に
よる 5 歳から 6 歳にかけての縦断的研究、
日本教育心理学会第 50 回総会、
2008/10/12、東京学芸大学
久保ゆかり ワークショップ 107「質的
データはどのように有効か？」の話題提
供者、日本心理学会第 72 回大会、
2008/9/21、北海道大学
久保ゆかり シンポジウム「関係性のな
かの発達を捉える 「長い目」と「広い
目」」の企画・司会者、日本心理学会
第 71 回大会、2007/9/19、東洋大学

〔図書〕(計 5 件)

久保ゆかり 社会-情動的発達 In 高
橋恵子・秋山弘子・湯川良三・安藤寿康
(編)『発達科学入門』 東京大学出版会
印刷中
久保ゆかり 情動理解と情動調整の発達
情動的知性を育む、In 日本発達心理
学会編『発達科学ハンドブック』第 5 巻
氏家達夫・遠藤利彦(編)『社会・文化に
生きる人間』 新曜社 印刷中
久保ゆかり 4 章幼児期の感情 4 節「感
情調整の発達」 In 上淵 寿(編)『感

情と動機づけの発達心理学』ナカニシヤ
出版 (野田淳子との共同執筆。久保執筆
部分は、74-84 頁)2008/4/20

久保ゆかり 6 章児童期の感情 In 上
淵 寿(編)『感情と動機づけの発達心理
学』ナカニシヤ出版 (丹羽さかのとの
共同執筆。久保執筆部分は 105-115 頁)
2008/4/20

久保ゆかり 感情の理解の発達 In 高
橋恵子・河合優年・仲真紀子(編著)『感
情の心理学』 放送大学教育振興会、
2007/4/1、113-124 頁

6 . 研究組織

(1)研究代表者

久保 ゆかり (KUBO YUKARI)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：10195498

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし